

第29回 現代世界の地誌的考察

■■ 現代世界の諸地域編 ■■

世界のさまざまな地域を見てみよう

～東南アジア～

監修・講師

永田淳嗣

学習のねらい

東南アジアは、高い気温とモンスーンの雨により水田稲作農業が盛んで、食文化などの面で日本との共通性も高い。民族や宗教・文化の面では、多くの民族が互いの宗教や文化を認め合いながら共存を図ってきた。政治・経済面では、経済成長が著しく、ASEAN 域内や国内の格差は残るものの、人々の暮らしは急速に変わりつつある。こうした東南アジアの人々の日々の暮らしに目を向けてみよう。

今回のポイント

- モンスーンのめぐみ
- 多様な宗教・文化の受容
- 社会・経済発展の課題

■■■ モンスーンのめぐみ ■■■

11の国々で構成される東南アジアは、そのほとんどが熱帯に属し、1年を通じて気温が高く年間の降水量も多い。東南アジアの気候を語るうえではずせないのが、季節風・モンスーン。モンスーンは季節により風向が180度変わる一組の風を指し、その風の変化とともに雨季と乾季が訪れる。そして雨季の大量の雨の水と高い気温に支えられて盛んに行われてきたのが水田稲作である。基本的には雨の降る時期に合わせて米を作るが、^{かんがい}灌漑で十分な水が得られれば年に2回、3回と作ることもできる。年間の降水量が少なく、農業は畑作や牧畜が中心の西アジアとは対照的である。1960年代半ばに始まる「緑の革命」では、高収量品種の導入や肥料の投入などにより、多くの国々で米の大幅な増産が達成された。東南アジアの多くの人々の主食は日本人と同じ米で、栽培される米の種類や米を用いた料理も数多い。米食文化を共有しているという点でも、日本からみて親近感のわく地域といえる。

■■■ 多様な宗教・文化の受容 ■■■

東南アジアは、1つの地域の中に、世界の主要な宗教が同居している。大まかにいうとインドシナ半島の各国には仏教徒が、インドネシアやマレーシアにはムスリムが、フィリピンにはキリスト教徒が多く暮らしている。さらに各国は、それぞれの国の中にも多様な民族や宗教・文化を抱えている。こうした状況には、どのような背景があるのだろうか。東南アジアは、もともと地域の広がりに対して人口の少ない地域であった。長い歴史の中でさまざまな文化や民族が流入し、時には融合したり、時にはお互いの立場を尊重しつつ共存したりして、多様な価

価値観を受け入れる柔軟な社会を形成してきた。またタイ以外の国々は植民地支配を経験し、多様な民族が協力して独立を勝ち取ってきたという歴史もある。もちろん東南アジアでも民族間の衝突は皆無ではないが、社会の安定にとって、寛容の精神をもって互いの文化を認め合うことの重要性を多くの人々が認識しているといえる。

■ ■ 社会・経済発展の課題 ■ ■

日本の高度経済成長が終わった頃から、東南アジアでも一部の地域で工業化が進展し、高度経済成長がみられるようになった。シンガポール、マレーシア、タイは、社会的な安定を背景に外資の導入を進め、工業化で先行した。一方、第二次世界大戦後も戦乱や閉鎖的な経済が長く続いた国々は工業化に遅れをとった。しかしベトナムは1980年代後半以降、外資導入による工業化を進め、カンボジア、ラオス、ミャンマーなどにも工業や社会基盤分野への海外からの投資が増大している。その背景にはASEAN（東南アジア諸国連合）域内での関税撤廃などの経済協力もある。ただインドネシアやフィリピンのように、国全体としては一定の経済成長を達成する一方で、貧富の格差が顕在化し、まだ多くの人々が劣悪な居住環境に暮らすといった状況もある。東南アジアは働き盛りの人口が多く、経済成長とともに人々の暮らしが全体として底上げされてきていることは確かだが、経済成長に伴うこうしたひずみをいかに克服していくかも課題となっている。